

やさしさ と ぬくもり のある学校

- 目標
- なかまと共に学び、基礎学力を身につけ、創造力のある児童
  - 心身の健康を考え、体力向上をめざす児童
  - 人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童
  - 分かる授業を創造し、児童をやる気にさせる教職員

アンケートは4段階評価で実施 ( A←90%以上 B←70%以上90%未満 C←70%未満 )

目標	評価項目(★…指導の重点)	対応する質問項目	対象	肯定的評価(4+3) R6 R7 変化			自己評価	総合評価	分析	今後の改善方策
① なかまと共に学び、基礎学力を身につけ、創造力のある児童	基礎・基本の学力向上 [研究・指導]	運動する意欲を高める指導の充実を図る。★【体育】	運動する意欲を高めることを意識しながら指導することができた。	教	98%	87%	↓-10.8%	B	教職員・保護者ともに肯定的評価は高水準であり、基礎・基本の定着を意識した指導体制は概ね機能している。 一方で、数値の微減や個人差も見られ、学力の差は単なる理解度の違いではなく、課題に粘り強く向き合う力や「できるようになる」という自己効力感といった非認知能力の差が影響していると考えられる。 学習内容以前に、学び続ける姿勢の育成が重要な課題である。	・正解を急がず試行錯誤を要する課題を、各教科で意図的に設定する ・思考過程や努力の継続を評価する共通の視点を教職員で共有する ・単元末に振り返りの時間を確保し、児童が自己効力感を言語化する時間を設定する。
		学習内容の定着を目指す。	基礎基本の学力定着に向けて指導を充実させることができた。	教	100%	97%	↓-3.4%	A		
		日々の教育活動で学習内容が定着できるような取組が行われている。	保	87%	86%	→-1.6%				
① なかまと共に学び、基礎学力を身につけ、創造力のある児童	学習意欲の向上 [研究・指導]	児童が話をよく聴き、意欲的に学ぼうとする態度を育てる。	児童が互いの話を聞き合い、意欲的に学ぼうとする態度を育てた。	教	92%	100%	↑7.7%	A	授業中の参加意欲については高い評価が見られる一方、家庭学習の継続性にはばらつきがある。 これは、学習が外的な指示や評価に依存しており、自ら学ぼうとする内発的動機付けや自己調整力が十分に育っていない児童が一定数存在するためと考えられる。 学習意欲を一過性のもにせず、継続的な学びにつなげる視点が求められる。	・学期初めにテトルで家庭学習の手引きを配信する。 ・学習内容と生活・将来とのつながりを示す → 単元導入時に「この学習は何の役に立つか」を身近な題材を使い、実生活とのつながりへの気付きを促す。 ・内発的動機付けを高める評価を行う → 結果よりも「工夫した点」「続けた点」を学級内で紹介する。
			先生の話や友だちの意見を聞き、授業に意欲的に参加していますか。	児	94%	96%	→1.9%			
		家庭学習(宿題を含む)に取り組む児童を育てる。	児童の実態に合わせて家庭学習(宿題を含む)の内容や出し方を工夫することができた。	教	90%	93%	↗3.6%	B		
毎日、家庭学習(宿題を含む)をしていますか。	児	94%	94%	→-0.5%						
毎日、自分から家庭学習(宿題を含む)をしている。	保	73%	74%	→1.9%						
① なかまと共に学び、基礎学力を身につけ、創造力のある児童	学習意欲の向上 [研究・指導]	児童が意見を伝えられるように取り組んだ。	児童が意見を伝えられるように取り組んだ。	教	98%	100%	↗2.5%	A	意見を発表したり考えを伝えたりする力は育ちつつあるが、他者の意見を取り入れて自分の考えを深める段階では課題が残る。 話し合いが形式的になりやすく、考えの変化を振り返る活動が十分に	・話し合い後の振り返りを必須化する → 「はじめの考え/今の考え」を必ず書かせ、考えの変化を可視化する。 ・ICTによる全体共有を
			互いに認め合う集団を育成できた。	教	100%	97%	↓-3.4%			
			友だちの意見を最後まで聞き、自分の意見を伝えることができましたか。	児	90%	90%	→-0.7%			

やさしさ と ぬくもり のある学校

- 目標
- なかまと共に学び、基礎学力を身につけ、創造力のある児童
  - 心身の健康を考え、体力向上をめざす児童
  - 人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童
  - 分かる授業を創造し、児童をやる気にさせる教職員

アンケートは4段階評価で実施（ A←90%以上 B←70%以上90%未満 C←70%未満 ）

目標	評価項目(★…指導の重点)	対応する質問項目	対象	肯定的評価(4+3) R6 R7 変化			自己評価	総合評価	分析	今後の改善方策
児童	思考力・判断力・表現力の育成 [特活]	互いに認め合える集団を実現する。	一人一人の意見を大切にできる学級ですか。	児	93%	95%	↗2.6%	A	A	振り返る活動が十分でないことが要因である。協働的に学びながら思考を更新する経験の質を高める必要がある。  ・発問の質を高める →「なぜそう考えたか」「他の考えと比べてどうか」を問う発問を校内研修で共有する。
	読書力の向上 [指導]	学校や家庭での読書習慣の定着を目指す。	読書の時間を確保し、児童に読書に親しませるようにしてきた。  学校や家で読書をしていますか。  家庭で読書をしている。	教 児 保	85%	83%	→-1.4%	C	C	児童・保護者・教職員すべての立場で評価が低下しており、読書習慣が十分に定着していない現状がうかがえる。読書が生活の一部として位置付けておらず、目的意識を持って継続する力や集中力、自己調整力といった非認知能力の育成機会が減少している可能性がある。  ・スモールステップ型読書を定着させる → 毎日給食の前後5～10分の読書時間を確保する。  ・家庭と連携する → 読書を啓発する文書を家庭学習の手引きとともにテトルで保護者に配信する。
66%	68%	→1.8%								
42%	52%	↑10.2%								

やさしさ と ぬくもり のある学校

- 目標 ○なかまと共に学び、基礎学力を身につけ、創造力のある児童  
 ○心身の健康を考え、体力向上をめざす児童  
 ○人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童  
 ○分かる授業を創造し、児童をやる気にさせる教職員

アンケートは4段階評価で実施 ( A←90%以上 B←70%以上90%未満 C←70%未満 )

目標	評価項目(★…指導の重点)	対応する質問項目	対象	肯定的評価(4+3) R6 R7 変化			自己評価	総合評価	分析	今後の改善方策
② 心身の健康を考え、体力向上をめざす児童	運動好きな子の育成 [保体]	楽しみながら体力をつけることができる授業の工夫を行う。	児童が楽しみながら体力をつける工夫をすることができた。	教	98%	87%	↓-10.8%	A	体育授業への評価は高く、運動への関心や参加意欲は一定程度保たれている。 一方で、主体的に挑戦する姿勢には個人差が見られ、失敗を恐れず取り組み力や粘り強さが十分に育っていない児童もいる。 運動を通した成功体験の積み重ねが、自己肯定感や挑戦意欲の育成に十分つながっていない点が課題である。	・挑戦を評価する体育指導を行う → 記録更新だけでなく「前より良くなった動き」を教師が具体的に言語化して評価する。 ・成功体験を積み上げる → 難易度を段階化した運動構成にし、全員が達成感を味わえるようにする。 ・苦手意識のある児童への配慮 → ベア学習や役割分担を取り入れ、安心して参加できる環境をつくる。
			体育の時間は積極的に運動していますか。	児	95%	95%	→0.2%			
		生涯スポーツの基礎となる運動に親しむ態度を養う。	体育的な取組を通して、ねばり強くやり通す心と体を育むことができた。	教	90%	90%	→0.3%	A		
	健康・安全・食育の意識向上 [保体・生指]	正しい姿勢や基本的な生活習慣を意識し、自分自身の健康についての関心を高める。	姿勢や生活習慣に関する指導を通して、自らの身体を守り鍛える態度を養うことができた。	教	100%	83%	↓-16.6%	B	教職員評価は改善傾向にあるが、児童評価は大きな変化が見られず、知識が行動として定着していない状況がうかがえる。 健康や安全、食に関する理解はあるものの、自分の生活を振り返り、行動を調整する自己管理能力が十分に育っていないことが要因と考えられる。	・自己管理を促す振り返り活動を行う → 月1回「生活チェックシート」を用いて自己評価を行う。 ・行動改善まで見通した指導を行う → 「できた・できない」で終わらず、次の目標を必ず立てさせる。 ・日常生活と結び付ける → 給食・休み時間・保健室で同じメッセージを繰り返し伝える。
			「ピン・ピタ・グー」や「早寝早起き朝ごはん」はできていますか。	児	74%	78%	↗3.4%			
		学校だけでなく地域においても安全に過ごそうとする児童を育てる。	どんな時でも安全に過ごそうとする児童を育成することができた。	教	93%	100%	↑7.0%	B		
			自分や周りの人たちがけがをしないように、「教室では静かに過ごす」「ろうかは右側を歩く」など安全に気を付けて生活していますか。	児	82%	84%	→1.9%			
	外遊びへの意欲向上 [保体]	体育の授業の初めに行ういわきサーキットや休み時間に行ういわ金ピックなどを通して、運動への意欲や体力向上を目指す。	休み時間、教室に残っている児童はほとんどいない。	教	59%	60%	→1.0%	C	教職員・児童ともに評価が低下しており、外遊びに消極的な傾向が顕著である。 外遊びの減少は体力面の課題にとどまらず、仲間と関わりながら遊びを創り出す主体性や社会性、感情を調整する力の育成機会の減少にもつながっている。	・外遊びイベントを定例化する → 学期に1回、運動委員会主催の外遊び企画を実施する。 ・遊びの選択肢を増やす → 校庭掲示で「今日のおすすめ遊び」を提示する。 ・参加しやすい環境づくり → 教師も一緒に遊び、初めの一步を支援する。
			休み時間は外へ出て遊んでいますか。	児	69%	66%	↘-2.6%			
		子どもたち同士で動き方を覚え、自ら学ぶ態度を育てる。	子どもたち同士で動きを学び合う態度を育てた。	教	92%	97%	↗4.5%	B		
			授業中や遊んでいるとき、運動のやり方を友だちに教えてあげたり、教えてもらったりしたことがありますか。	児	78%	81%	↗3.8%			

やさしさ と ぬくもり のある学校

- 目標
- なかまと共に学び、基礎学力を身につけ、創造力のある児童
  - 心身の健康を考え、体力向上をめざす児童
  - 人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童
  - 分かる授業を創造し、児童をやる気にさせる教職員

アンケートは4段階評価で実施 ( A←90%以上 B←70%以上90%未満 C←70%未満 )

目標	評価項目(★…指導の重点)	対応する質問項目	対象	肯定的評価(4+3) R6 R7 変化			自己評価	総合評価	分析	今後の改善方策
③ 人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童	進んで挨拶をする子の育成 [生指]	進んであいさつをし合う人間関係を大切にしたい学級づくりを目指す。	進んであいさつをし合うような人間関係を大切にしたい学級をつくることのできた。	教	90%	87%	↓-3.1%	B	学級内では一定の成果が見られるが、家庭や地域においては評価が伸び悩んでいる。 場面が変わると行動が安定しにくく、挨拶を自分から行う社会的自己効力感や主体性が十分に育っていないことが要因と考えられる。	-挨拶の意味を共有する → 学級会で「挨拶をする何がかわるか」を話し合う。 -児童主体の挨拶運動を行う → 委員会が中心となり、挨拶週間を企画する。 -行動の成果を可視化する → 挨拶で生まれた良い場面を掲示や放送で紹介する。
		家庭や地域でもあいさつができる児童を育てる。 ★【あいさつの徹底】	家の人や地域の人に元氣よくあいさつをしていますか。	児	83%	82%	→-0.5%	B		
			すすんであいさつをしている。	保	71%	69%	↓-2.1%			
③ 人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童	掃除をきちんとする子の育成 [生指]	清掃によって美しい学校環境を保持し、身の回りを清潔に整頓することができるような習慣を育成する。	教職員自ら掃除に取り組みながら、担当場所の指導を行うことができた。	教	98%	97%	→-0.8%	B	教職員評価は高いものの、児童評価は低下しており、清掃活動への意識に差が見られる。 掃除を作業として捉え、最後までやり切る粘り強さや、自分の行動が学校環境を支えているという貢献感が十分に育っていない児童が一定数存在すると考えられる。	-掃除の意義を再確認する → 年度初めに「掃除は誰のためか」を学級で確認する。 -振り返りの時間を確保する → 掃除後に1分間の振り返りを行う。 -貢献感を高める声かけを行う → 教師が「学校がきれいになった理由」を具体的に伝える。
			掃除の時間、余計な話をしないで掃除をしていますか。	児	70%	76%	↑5.7%			
			学校は清潔で整っている。	保	83%	73%	↓-9.5%			
		清掃活動を通して、勤労の価値や必要性を体得するとともに、進んで奉仕をしようとする態度を育てる。	進んで奉仕をしようとする態度を育てた。	教	93%	93%	→0.8%	A		
③ 人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童	きまりを守る子の育成 [生指]	年間目標を意識して守ろうとするなど、規律ある生活ができる児童を育てる。	年間のキャッチフレーズを意識した指導ができた。	教	75%	77%	↑1.7%	B	基本的なきまりは守られているものの、年間目標を意識して行動する姿は十分とは言えない。指示があれば守れるが、自ら判断して行動する自律性や自己抑制力が十分に育っていない状況がうかがえる。	-きまりの意味を考える場を設ける → 学級会で「なぜ必要か」を話し合う。 -児童が関わる仕組みをつくる → 生活目標の見直しに児童代表を参加させる。 -自律的行動を評価する → 指示がなくても守れた行動を積極的に認める。
			キャッチフレーズの「あいさつでスマイルゲットだぜ!!」を意識して行動していますか。	児	81%	77%	↓-3.8%			
		基本的な生活習慣の育成を図り、社会のきまりを守ろうとする態度を育てる。	基本的な生活習慣の育成を図り、社会のきまりを守ろうとする態度を育てた。	教	100%	100%	→0.0%	A		
③ 人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童	人権意識・道徳性の育成	自分も他者も大切にする集団を育てる。	児童の人権意識を高めるために、積極的に人権学習を進めた。	教	95%	90%	↓-5.1%	B	人権学習や感謝の取組により肯定的評価は高いが、家庭での実感はやや弱い。 学習の場では理解できているが、日常生活の中で行動として継続する力が十分に育っていない可能性がある。 【特支】 ○学校全体として人権	-振り返りと対話を必須化する → 体験学習後に必ず感想共有の時間を設ける。 -異学年交流を継続する → 年間計画に位置付け、継続的に実施する。 -日常場面での実践を
			学校は、自分や友達を大切にする心を育もうとしている。	保	90%	90%	→0.2%			

やさしさとぬくもりのある学校

- 目標
- なかまと共に学び、基礎学力を身につけ、創造力のある児童
  - 心身の健康を考え、体力向上をめざす児童
  - 人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童
  - 分かる授業を創造し、児童をやる気にさせる教職員

アンケートは4段階評価で実施（A←90%以上 B←70%以上90%未満 C←70%未満）

目標	評価項目(★…指導の重点)	対応する質問項目	対象	肯定的評価(4+3) R6 R7 変化			自己評価	総合評価	分析	今後の改善方策
	<p>[人教・特支]</p> <p>豊かな感性を育み、互いに励まし合い共に育つ人間関係をつくる。</p> <p>★【感謝】</p>	他人を思いやり、助け合う気持ちや感謝の気持ちを育んでいる。	教	100%	100%	→0.0%	A	意識や感謝の気持ちを育てる取組は進められているが、児童が多様な特性や困り感への理解を深め、他者を尊重した行動へと十分につなげられているとは言い切れない状況がうかがえる。	<p>促す</p> <p>→ 思いやり行動を見つけて紹介する。</p> <p>【特支】</p> <p>○今後は、すぎのこタイム(すぎのこ学級と各学級との交流)の機会をより充実させるとともに、交流の目的や内容についても見直し、児童同士の相互理解がより深まるよ</p>	
		家族や友達に「ありがとう」の気持ちを伝えることができていますか。	児	96%	96%	→0.2%				

やさしさ と ぬくもり のある学校

- 目標
- なかまと共に学び、基礎学力を身につけ、創造力のある児童
  - 心身の健康を考え、体力向上をめざす児童
  - 人を思いやり、感謝する心を持ち、親孝行する児童
  - 分かる授業を創造し、児童をやる気にさせる教職員

アンケートは4段階評価で実施 ( A←90%以上 B←70%以上90%未満 C←70%未満 )

目標	評価項目(★…指導の重点)	対応する質問項目	対象	肯定的評価(4+3) R6 R7 変化			自己評価	総合評価	分析	今後の改善策	
④ 分かる授業を創造し、児童をやる気にさせる教職員	職務意識の向上 [教務]	時間厳守など服務規律を徹底する。	時間厳守など職務に係わる義務を意識して行動することができた。	教	98%	97%	→0.9%	A	A	服務規律や責任感に関する評価は非常に高く、教職員一人一人が高い職務意識を持って教育活動に取り組んでいることがうかがえる。 一方で、この状態を持続させるためには、心理的安全性の確保や業務負担の適切な調整など、組織として教職員を支える視点も重要になっている。	・業務の整理と役割分担を明確にする → 年度初めに業務一覧を作成し、重複を減らす。 ・実践を認め合う文化をつくる → 職員会で良い実践を共有する時間を設ける。
		教員としてのプロ意識を常にもって行動する。	いかなる時も教員としての自覚をもって行動することができた。	教	98%	100%	↗2.5%	A			
	組織力の強化 [教務]	学年間の共通理解を図り、連携をとる。	様々な課題について、学年間の共通理解を図り、連携を取りながら進めることができた。	教	98%	100%	↗2.5%	A	A	学年間・分掌間の連携や情報共有は進んでおり、組織として一定の機能を果たしている。 今後は、情報を共有する段階から、共通の判断基準や価値観を基に協働して行動できる段階へと質的な深化が求められる。	・学校目標を共通言語化する → 非認知能力の視点で重点を整理し、全職員で共有する。 ・振り返りの場を定例化する → 学期末に分掌ごとの振り返りを行う。
		各学年や各分掌の取組を全職員で共有する。	各学年や各分掌の取組を全職員で共有することができた。	教	90%	97%	↑6.7%	A			
	地域との連携推進 [教務]	対人業務であることの自覚を高める。	対人業務であることの自覚をもって行動することができた。	教	100%	100%	→0.0%	A	A	地域や保護者との連携は継続的に行われているが、家庭からの評価は必ずしも十分とは言えない。 取組自体は充実しているものの、その成果や意義が十分に伝わっておらず、学校の活動が見えにくくなっている可能性がある。	・体験から感謝までを一体化する → 地域活動後に児童が感謝を伝える場を必ず設ける。 ・成果を積極的に発信する → 学校だよりやHPで具体的な活動の様子を紹介する。
			学校は家庭との連携を適切に行っている。	保	88%	85%	↓-3.3%				
	コミュニティ部の活動を取り入れ、保護者や地域人材と協働する。	保護者や地域の方々と協働することができた。	教	90%	93%	↗3.4%	A				